

【宮城県名取市の方言概観】

ここでは、今年の会話集に現れた特徴を中心に、名取市方言を概観していきます。

㊦ 音 声

【子音】

▼カ・タ行の有声化

語中・語尾にあるカ・タ行の音が有声化し、ガ・ダ行になる。

☞これは平たく言えば、単語の頭以外にあるカ・タ行の音が濁音のガ・ダ行になることです（専門的に言えば、（有声）母音に挟まれた無声子音/k/t/が有声子音/g/d/になること）。単語の頭にあるカ・タ行は普通は有声化しません（下の例で言えば柿は「ガギ」にはなりません）。

例) カ行→ガ行 (/k/→/g/) : 開ける → アゲル、柿 → カギ
タ行→ダ行 (/t/→/d/) : 旗 → ハダ、 的 → マド

今回の会話でもこの特徴はよく見られます。カ行音については「ナンダガ」（なんだか）「イギデ」（行きたい）「イッパグ」（一泊）「サゲ」（酒）「ドゴ」（どこ）など、タ行音については「アンダ」（あなた）「ソノウジ」（そのうち）「ブズダン」（仏壇）「デケ°」（出てけ）「アド」（あと）などの例が聞かれます。ただし、完全にガ行やダ行に濁るのではなく、共通語の清音よりはやや濁っているといった程度の発音も多く聞かれます。

▼ガ・ダ・ザ・バ行の鼻音化

語中・語尾にあるガ・ダ・ザ・バ行の音が鼻音化する。

☞今見たように、単語の語中・尾にあるカ行がガ行になることによって、「開ける」はアゲルになって、「上げる」と混同しそうですが、「上げる」のほうは「げ」が鼻にかかった音（鼻濁音とも言い、「ケ°」のように半濁点で表記します）のアケ°ルとなり、

「開ける」＝アゲル

「上げる」＝アケ°ル

となって両者の混同は起こりません（この現象を鼻音化と言います）。今回の会話の中では「ウッショスカ° タ」（後ろ姿）「ツキ°」（次）「スク°」（すぐ）「アケ° ノノ」（挙げるの）「マコ°」（孫）などが聞かれましたが、鼻にかかっているのかいないのか微妙で聞き取りの難しい例も多くあり、そのような例は濁音のまま表記した箇所もあります。

この鼻音化については、古い方言でダ・ザ・バ行についても見られることが指摘されています。普通、これらの音は次のように「ンダ・ンゼ・ンビ」のように上付きのンで表記されますが、本会話集では「ン」がはっきりと聞き取れる場合は上付きにせず、そのまま「ン」と記しています。

例) ダ行：肌 → ハンダ
 ザ行：風 → カンゼ
 バ行：首 → クンビ

今年度の名取市の会話からは、「マンズ（まあ）」「ヤンダ（嫌だ）」が聞かれましたが、きちんと聞き分けられる程度に鼻音化している用例はたいへん少なくなっており、鼻音化の衰退がうかがえます

▼キ（キャ行）の口蓋化

キが「チ」に近く発音される。また、キャ、キュ、キョも「チャ、チュ、チョ」と似たように発音される。

☞これは「口蓋化」と呼ばれる現象の一種です。この場合の口蓋化とは、キの発音をするときに、舌の前の部分が上あご（硬口蓋）に接近してキとシの間のような音になる現象を指します。似た現象は広く東北地方で一般的に見られますが、名取の方言では極端に口蓋化を起こしてチに近くなる例もあります。

例) 機械（きかい） → チカイ
 救急車（きゅうきゅうしゃ） → チューチューシャ
 今日（きょう） → チョー

今回の会話集の話者たちにもこの特徴は見られ、「シカワチヨス」（氷川きよし）や「ニンチ」（人気）、さらに口蓋化したチが有声化してジとなる「ソンドジ」（その時）などが聞かれましたが、極端に口蓋化する例はそう多くありません。一方、キとチの間くらいの発音に聞こえるものや、シに聞こえるもの、共通語と同じくキのままであるものなどが現れています。

【母音】

▼イとエの統合

イとエが同じ発音となる。

☞母音単独で発音されるイとエは区別されず、ともにエに近い音になります。

例) 息 (いき)、駅 (えき) → 両方ともエギ
鯉 (こい)、声 (こえ) → 両方ともコエ

今回の会話でも、「エソク°」(急ぐ) という例が聞かれました。ただし、この特徴も弱まってきており、イとエが似たような発音になるものの、完全に同じではなく、一応区別はするという状態になりつつあるようです。

▼シとス、ジとズ、チとツなどの中舌化

イ段音とウ段音が近い音となる。

☞イの音がウの音に近づく現象 (またはその逆も) を「中舌化」(ちゅうぜつか、なかじたか) と言います。宮城ではこの中舌化がよく見られるため、イ段音とウ段音が互いに近い音になります*。伝統的な方言では特にシとス、ジとズ、チとツはそれぞれ「ス」、「ズ」、「ツ」と発音され、区別がありません。

例) 獅子 (しし)、煤 (すす)、寿司 (すし) → すべてスス
知事 (ちじ)、地図 (ちず)、辻 (つじ) → すべてツズ

今回の会話では「スバラグダ」(久しぶりだ)、「ズスン」(地震)、「マツガエ」(間違え)、「サンズ」(三時) などの例が聞かれますが、すべてが中舌化しているわけではなく、シとス、ジとズ、チとツが似た発音ではあるものの一応の区別はなされている、というものも多くあります。また、共通語とあまり変わらない発音が聞かれることもあります。また、その他の行では互いに近い音になるものの一応の区別は持っています。その中でも本会話にも見られるようにニとヌが極端に近づいて発音されているために、「ヌデ」(二台)、「ダズンヌ」(駄賃に) などと表記したところもあります。その他、ミとム、リとルなども互いに近い音になることが指摘されていますが、今回の会話ではそのような例は確認されず、共通語とあまり変わらない発音がされることも多くなっているようです。

㉑ アクセント

㉑ アクセント

名取市はアクセントの型がない無型アクセント地域である。

☞例えば「箸」と「橋」を声に出したときに、有型アクセントの地域ではハトシの音の高低が決まっています（＝型がある）、それによって単語の区別が付きませんが、無型アクセント地域では高低が決まっていない（＝型がない）ため、区別されません。

共通語話者がこの無型アクセントの発音の地域のことばを聞くと、文が平らでのっぺりしているとか、区切れがわからず意味が取りにくいとの印象を受けるようです。アクセントの型がないためか、同じ無型アクセント地域の福島県や茨城県などに似た独特の音調が聞かれます。

㉒ 文 法

【助動詞】

▼「べ」

共通語の「～だろう」（推量）や「～しよう」（意志）に相当する助動詞に「べ」がある。

☞「べ」は<推量><意志>のほかにも<確認><勧誘>などがあり、その用法は多岐にわたります。また、「取る、起きる、来る」など「る」で終わる動詞に接続するときは「る」が「ッ」となる促音便が生じ、それぞれ「トッペ、オギッペ、クッペ」のようになります。

例) 明日、雨だべ。(明日雨だろう。)	<推量>
明日は早く起きッペ。(明日は早く起きよう。)	<意志>
お祭り、お前も行くべ？(お祭り、お前も行くだろう?)	<確認>
みんなでがんばッペ。(みんなでがんばろう。)	<勧誘>

名取市の会話では、ナンダベ(なんだろう<推量>)、イク°ベ(行こう<意志>)、コンドノ ニズヨービダベ(今度の日曜日だろう?<確認>)、イッショニ カエッペワ(一緒に帰ろうよ<勧誘>)のような例が確認できます。また、「ナンダベ アンダ ナニ シテンノ」(なんだよ あなたなにしているの)、「ドースッペナヤ」(どうしようなあ)のように感動詞的に用いる例も見られます。

【格助詞】

▼「が」「を」の不使用

共通語の「が」「を」にあたる格助詞を使わないことが多い。

☞共通語の「が」のような主格を表す助詞や、「を」のような目的格を表す助詞が用いられず、以下のように無助詞で表示されることが多いです。

例) 主 格：俺 行く (俺が行く)

目的格：酒 飲む (酒を飲む)

今回の名取市でも「アメ フル」(雨が降る)、「キーツケテ」(気をつけて)などのように、助詞が見つからないものが現れています。

☞また、共通語の「を」相当のものとして「バ」や「ドゴ」が用いられることもあります。

例) 酒バ飲む (酒を飲む)

俺ドゴ連れて行ってくれ (俺を連れて行ってくれ)

今回の会話の中では「バ」の形式は確認できませんでしたが、「Bサンドゴ サソツタラ イーンデネ」(Bさんを誘ったらいいんじゃない)のように「を」相当の「ドゴ」の例が聞かれました。

▼「サ」

共通語の「へ」「に」に当たる格助詞に「サ」がある。

☞「サ」は共通語の「へ」よりも意味が広く、「に」に重なるところが多いですが、存在の場所を表す「ここサある」は言えないなど、その用法は「に」とも若干の違いがあります(ただし、若年層では存在の場所を表す「サ」も使えるという報告があります)。

例) ドゴサ イク^o ノー (どこへ行くの)

ビョーインサ イッテ (病院へ行って)

エサ カエッデキデ (家に帰ってきて)

カタズゲサ キタカラ (片付けに来たから)

ココサ トマッテタ (ここに泊まっていた)

名取市の会話からも、「ウジサ カエンダガラ」(家に帰るんだから)、「トッサ カガッタラ」(採りにかかったら)のように多くの「サ」が聞かれます。また、若年層に広まっている存在の場所を表す「サ」も見られましたが(「ドコサ アッペナ」(どこにあるだろうな))、一方で「コンナドコニ アンダイネ」(こんな所にあるんだろうね)のように「ニ」で現れるものもあり、しだいに、そのような言い方をするようになってきたものと考えられます。

【接続助詞】

▼「ガラ」

共通語の「から」に当たる接続助詞(順接既定条件)に「ガラ」がある。

☞「ガラ」の用法は共通語の「から」とほぼ同じと思われます。共通語同様、次のように、終助詞的に使用されることもあります。

例) ンート ナッタガラ クッテケネ。(うんとなったから食べてくれない)
ベズナヒト サソーガラワ。(別な人誘うからね)

▼「ケント (モ)」

共通語の「けれど (も)」に当たる接続助詞(逆接既定条件)に「ゲンド (モ)」がある。

☞「ゲンド (モ)」のほかに、「ゲッド (モ)」「ゲント (モ)」といった形も使用されます。

例) トメンナッテ イワネゲンドモ (停めるなって言わないけれども)
ミッケランナインダゲッドモ ドコサ (見つけられないんだけれどもどこに)
ハラ ヘッターダゲントモ クワネデ (腹減ったんだけれども食べないで)

☞「カラ」と同様、終助詞的に使用されることも多いようです。

例) クサトリモハガイガネゲンドモ。(草取りもはかどらないけれども。)
デジレバ ツグリデンダゲッドナー。(出来れば作りたいんだけどな。)

【接続詞】

▼「(ン) ダガラ」「ンデ」「ンダゲッド」

共通語の「だから」にあたる「ンダガラ」、「それでは」にあたる「ンデ」などが用いられる。

例) ンダガラ チョーダゲ オイデインガラサ。(だから、今日だけ置いていくからさ)
ンデ イッテクツカラネ。(それでは、行ってくるからね。)

☞今回の会話集には「ンダガラ (ホンダガラ、ダガラ)」が、単独で相づちのようにも使われ、相手の言ったことへの強い同意・共感を表す用法も見られました。

例) — ンデ ズイブン ツカレデ カエッテキタンダ。
(それではずいぶん疲れて帰ってきたんだ。)
— ンダガラ。(そうなの。)

【終助詞】

▼「チャ」

共通語の「だろ」「じゃない(か)」「よね」などにあたる終助詞として「チャ」が用いられる。

☞相手が知っているはずだ、当然わかるはずだ、と思う事柄を示し、相手に確認させる機能があります。

本会話集にも多くの「チャ」が聞かれます。東日本大震災後に名取市で編まれた被災者の方言句集には『負けねっちゃ』という題が付けられており、「負けないよ」という意味となっています。

【待遇表現】

▼丁寧な言い方に「ス」「(デ) ガス」「イン」「サイン」などが用いられる。

例) ス：ハイッテルスカ (入っていますか)
(デ) ガス：イガス (いいです)
イン：シャライン (下がちなさい)
サイン：キテケサイン (来てください)

【参考文献】

加藤正信 (1969) 「東北方言概論」『言語生活』210

加藤正信 (1992) 「宮城県方言」平山輝男・大島一郎・大野眞男・久野眞・久野マリ子・杉村孝夫編『現代日本語方言大辞典 第1巻』明治書院

佐藤亨（1982）「宮城県の方言」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一編『講座方言学 4 北海道・東北地方の方言』国書刊行会

東北大学方言研究センター（2012）『方言を救う、方言で救うー3.11 被災地からの提言ー』ひつじ書房

※このほか、会話本文の注の作成に当たっては、多くの先行研究を参考にしました。